

日本福祉大学社会福祉学部・日本福祉大学福祉社会開発研究所
『日本福祉大学社会福祉論集』第105号 2001年8月

研究ノート

モンゴル青年の生活と就労問題

長 沢 孝 司

本稿の課題は、モンゴル国の首都ウランバートル市において、今日の青年の生活と就労の実相を面接調査を通して明らかにすることにある。

モンゴルが1991年に社会主義から市場経済に移行を開始して10年が経過した。筆者は前稿において、この移行期における家族生活の実相を明らかにしておいたが⁽¹⁾、その中で明らかになったことの1つは、家族のなかの青年の就労が、公式統計に示される数値をはるかに超えて深刻な様相を呈していたことであった。いうまでもなく、就労保障はあらゆる社会保障の基礎であり、移行期のモンゴルの社会的困難を象徴する課題である。

だが同時に、いくつかの現地でのヒアリングによって次の事実が明らかになってきた。すなわちモンゴル国青年を覆う就労の不安定には、社会主義から市場経済への移行期におけるモンゴル特有の社会的構造が深く関連しているということである。その構造は、彼らの職業生活の実相を把握することを通してはじめて明らかとなる。そこには先進諸国の経験側では計れない特有の構造があるのである。本稿はこうした問題認識に基づいて、面接調査による事例分析によって上記の課題にせまることを目的としている。

ただし今回の調査では、後述するようにさまざまな制約が伴ったため、上記の課題に対応する十全な解明にはなお至っていない。とくに失業青年の事例を拾うことが残念ながらできなかった。その意味で、本稿はなお中間的報告の域を出るものではないことを断っておきたい。

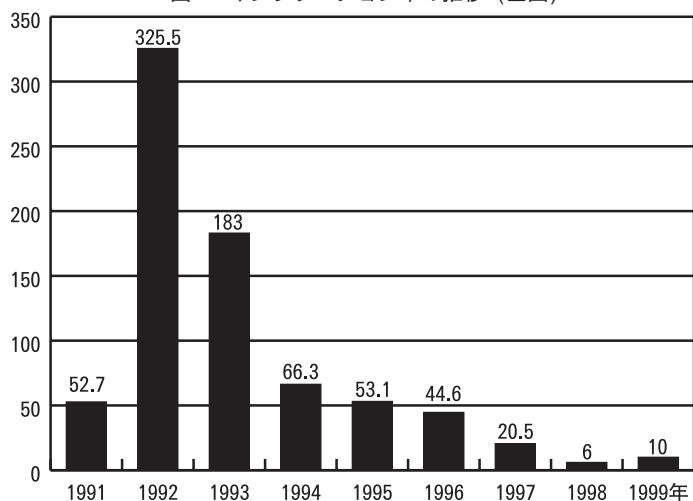
就労状況と調査の設計

1. ウランバートル市の経済状況

地域の就労（雇用）状況を基本的に規定する要因は、いうまでもなくその地域の経済状況である。そこでまず、モンゴル国とウランバートル市のこの10年間の経済の推移を概観することから始めよう。

すでに前稿で紹介したように⁽²⁾、モンゴル国の市場経済への移行は、91年に国有財産の3分の2を子供にいたるすべての国民に額面1万トゥグルクのクーポンを配布することによって開始された。このクーポンの配分は、その使用方法について十分な説明がほとんどないまま拙速に行わ

図1 インフレーション率の推移 (全国)



出所) "Mongolian Statistical Yearbook" National Statistical Office of Mongolia Ulanbaatar, 2000, p.63.

れたものであったが、当時の国民としては巨額の収入を得たことになる。しかしこの収入を前提として激しいインフレーションが国民を直撃することとなった。こうして社会主義時代にはほとんど変化しなかった消費者物価が一挙に高騰した。図1は91年以降のインフレ率の推移を示したものであるが、92年から93年にインフレがとりわけ激しかったことが分かる。こうして98年には消費者物価は91年の約100倍となった。もちろんこの間に賃金や年金は数次にわたって引き上げられたが、物価の高騰には到底追いついていない。筆者が初めてウランバートル市を訪れたのは97年であったが、この時の市の景観は疲弊した街という感否めないものであった。例えばアパートの壁がはがれたまま屋上には草が生え、道路のマンホールの鉄板がなく、旧東ドイツや旧ソ連製のバスがエンジンむきだしで走っていたし、酔いどれやストリートチルドレンを至るところで見かけた。市場経済になってこれらを補修する余裕がなく、失業者・貧困者が層となって出現していたのである。

だがその後、物価は図1のとおり98年からは安定（高値安定）して推移している。そして99年以降になるとインフラ整備が軌道にのり始め、至るところにカフェ、食堂、バー、スーパーマーケットが出現し、商品の種類が劇的に増え、自家用車が増え、新しいバスが走り、建設のクレーンがあちこちで見られるようになった。その変容ぶりは、同市を2年離れていたモンゴル人を仰天させるほどである。

だがこうした同市の激変をもたらしたのは、主として海外援助と外国資本・商品（特に韓国、ついでドイツ）の進出によるものであって、残念ながら本国資本の成長に支えられたものではない。表1を見てみよう。これは95年物価を基準にとって工業総生産額の推移を示したものである。この表が示すとおり、99年に至っても鉱業を除いてなお社会主義時代の90年水準には遠くおよばず、緩慢な回復にとどまっている。このようにモンゴル経済は本国資本による安定した再

表 1. 工業総生産額 (1995 年を基準とする実質価格) (トゥグルク)

	1990 年	1995 年	1996 年	1997 年	1998 年	1999 年
全 工 業	324,859.3	223,689.7	218,079.1	227,644.2	234,952.5	237,944.0
うち						
鉱 業	28,948.4	65,728.7	70,868.5	88,967.5	94,655.8	97,449.0
食品・飲料	110,113.5	45,003.8	34,363.0	34,225.5	33,033.4	29,188.1
織 維	42,990.6	21,932.5	25,076.1	19,728.5	21,671.8	22,621.4
衣 服	9,919.8	2,094.8	1,353.9	1,765.4	1,752.2	1,997.4
電力・温熱	34,782.0	42,273.1	41,427.6	41,966.2	42,490.8	44,290.6

出所) 図 1 と同じ. p.119.

生産の軌道には乗っていない。その意味でモンゴルはなお市場経済への移行期にある。

2. 青年層の就労・失業問題

以上の経済状況を前提にして、次に同市の就労状況を見てみよう。

まず表 2 を見られたい。市の人口は市場経済の 10 年間に 55 万 5000 人から 69 万 1000 人へと激増している。この間の同市の人口自然増は 5000 人近くにまで減少してきているから、この間の人口増大が社会増、すなわち地方からの流入によるものであることがわかる。同市は「特別市」として、同市に移住するには市当局の許可が今日でも必要であり、市当局は住宅保障やインフラ整備などの観点から流入の抑制政策をとっているが、増大基調に歯止めがかかっていない。この流入者の多くは地方の県庁都市からの者と推定されるが、県別には同市を取り囲んでいるトゥブ県が一貫して最も多く、ついでザブハン県、オブス県という西端に位置する県からの流入が多くなっている⁽³⁾。

次に、同市の経済人口構成を見よう。表 3 がそれである。ここに示されているように、市の生産年齢人口（モンゴル国統計局では男 16～59 歳層、女 16～54 歳層をさす）は 97 年現在 37 万 2000 人である（市人口の 59%。なお従属人口の大半はわが国と違って 15 歳以下人口である）。しかし、就労人口は 20 万 2000 人にすぎない。このうちの雇用者数は 19 万 3000 人となっている。モンゴルでは社会主義時代から、わが国のように女性の結婚・出産による職業生活からのリタイアの習慣はないから、生産年齢人口の少なからぬ部分が事実上の失業者であると見るのが妥当であろう。同時にこの表から確認できることは、同市の生産年齢人口が、先に見た流入者の増大に伴って絶対的に増大しているにもかかわらず、この間に就労人口と雇用者数はほとんど変化していないことである。要するに人口増に伴う就労の受け皿がほとんど整っていないのである。ここにもウランバートル市の就労・失業問題の深刻性が端的に示されている。

ここで、参考までに同市の雇用者の産業別構成を示せば表 4 のとおりである。この表において、モンゴルの主力産業の 1 つである鉱業労働者や新しい金融労働者が増えていることは明るい材料と言えるが、教育や保健に関わる労働者の減少は重要な問題を孕んでいる動きと言えよう。

表2. ウランバートル市人口 (人)

年	人 口	うち自然増
1990	567,800	11,114
1991	577,000	10,236
1992	583,900	8,255
1993	593,800	4,523
1994	604,200	6,099
1995	614,500	6,218
1996	626,500	6,240
1997	637,436	5,443
1998	668,700	-
1999	691,000	-

出所) "Demographical Reference Book of Ulaanbaatar" Ulaanbaatar, 1998, p.6, p.61.

表3. ウランバートル市の経済人口構成 (人)

年	生産年齢人口	就 業 人 口	雇 用 者 数	失 業 者	失業率
1991	-	217,507	203,741	13,766	6.2
1992	-	214,684	206,279	8,405	3.9
1993	-	205,521	195,848	9,673	4.0
1994	340,201	206,454	194,410	12,044	5.8
1995	346,944	193,690	186,738	6,952	3.6
1996	353,025	193,255	182,628	10,627	5.5
1997	371,937	202,103	192,994	10,109	5.0
1998	-	209,000	201,700	7,262	3.5
1999	-	216,200	209,800	6,345	3.1

出所) 1. 図1と同じ. p.46, p.47, p.50. 2. 表1と同じ. p.4, p.73, p.74.

表4. ウランバートル市の産業別・非産業別雇用者数 (人)

年	農林業	鉱山業	製造業	電力・水道料	建設業	商 業	ホテル・食堂	運輸・通信
1994	5,244	3,319	28,900	9,173	12,673	33,960	13,985	15,244
1995	5,475	5,223	37,344	9,104	15,362	31,131	10,222	14,615
1996	5,477	5,356	37,253	9,115	15,595	31,125	10,219	14,593
1997	6,195	5,633	35,846	10,753	16,583	34,306	10,749	15,481

年	金融業	不動産業	官 庁	教 育	保 健	公共施設	その他	外国人
1994	2,350	5,652	9,826	19,870	24,960	9,254	-	-
1995	3,117	3,032	9,415	16,505	15,699	10,078	250	196
1996	2,976	2,539	7,616	13,576	13,709	11,469	1,642	366
1997	3,520	3,861	7,255	12,922	14,810	12,415	1,276	389

出所) "Demographical Reference Book of Ulaanbaatar" Ulaanbaatar, 1998, p.72.

さて、再び表3に戻ろう。同市の統計局による失業率は約3~6%で推移しており、これは他の諸県に比して最も低い数値である。だがこれはウランバートル市の失業状態を正確に反映しているとは言いがたい。なぜなら、モンゴル国労働法で定められている「失業者」とは、生産年齢人口に含まれる者のうち働く能力があり、雇用・自営業者でなく、働く用意があり、積極的に仕事を探しており、雇用登録事務所に失業登録している者に限っているからである⁽⁴⁾。わが国の「完全失業率」の計算方法ほどには狭く限定していないが、他の先進諸国の基準に照らして明らかに狭い規定である。ここで雇用登録事務所とは、わが国の職業安定所に相当する機関であるが、後述するように、事務所に登録されている求人数が少ない上に賃金が低すぎるため、失業登録する人自体がきわめて少ないのである。したがってこの数値は失業の実態を反映しているとは言い難い。

だが残念ながら、この公的統計以外には失業の実態、とりわけ青年層のそれを確実に捉える資料はわれわれの手許にはない。そこで、青年層の就労・失業状態に迫る資料として次の2つの資料を紹介しよう。その1つは、筆者が前稿で行った家族調査の結果である⁽⁵⁾。この調査はウランバートル市内に住む50~77歳の老人10人を対象に99年に行った調査であるが、この調査においてその老人の子供（同居、他出）の就労状態を質問した。その結果を筆者は次のように要約している。すなわち「36人のうち4人は学生であるからそれを除外した32人の職業状況を見ると、印の付いている子（失業または不安定就業）は13人になる。すなわち、子供世代のうち失業または不安定就業者（夏季のみ就業、臨時的運転手、ナイマーチンなど）は40.6%にも及んでいるのである。しかもその場合、印がついている人は20歳代以下の若い世代ほど多くなっている」。この調査結果から、ウランバートル市青年の就労状況が公式統計を上回る深刻さであることが裏付けされた。ただし、この調査は結果的に比較的安定した老人層が対象となったため、青年層全体の動向を正確に捉えているかにやや疑問を残した。

そこで、今回の調査対象者の一人であるC君（26歳）に筆者は次のように質問してみた。「あなたの同世代の人をざっと見渡してみて、仕事のある人とない人の比率は全体を10人とすればどれくらいの比率になりますか」と。その答えは次のとおりであった。「そうだねえ、10人のうち定期的に収入のある仕事についている人が4人、不定期に時々仕事をしながら職を探している人が2人、残り4人は仕事を探してもいない。家や街で一日中ゴロゴロしているよ」。この数値は筆者の予想を越える深刻な数値であったため、今回の調査の通訳をお願いしたモンゴル国立大学経済学部助手のカシチュルン氏に再度確認したところ、「たしかに大体このくらいの比率になるでしょうね。C君は実際範囲が広いし世の中のことよく知っているから、信頼できる数値だといえますね」とのことであった。カシチュルン氏の補足説明によれば、「青年の失業問題は本当に深刻ですよ。雇用登録事務所はウランバートルに数箇所あって、そこに登録している人が失業者にカウントされますが、若い人の求人が少ないので、最初から登録していない人が多いんです。そこで青年の就労問題の解決を要求しているかなり大きな『モンゴル青年連合』という団体があって、政府に改善要求を出したり、みずから就職斡旋もしています」とのことである。

3. 調査の設計

以上が今回、青年層の生活・就労問題に調査の焦点を絞った直接的な出発点である。しかしわれわれの課題は、彼らの就労の不安定性のみを明らかにしてこと足れりとするものではない。冒頭で記したように、われわれの課題はむしろ、彼らの不安定就労の構造を捉えることである。そこにはモンゴルの市場経済の移行期に特有の社会構造が反映されている。そのためには、生活主体としての青年の生活・就労過程という深みに下りて捉えることが必要であろう。

この課題に迫るために、調査対象としてあらかじめ次の4階層の青年を想定した。

第 階層 = 年間を通して安定した就労と収入を得ている層。

第 階層 = 仕事が途切れる時期はあるが、それ以外の時期はほぼ定まった収入がある層。

第 階層 = 時々しか仕事がなく、したがって収入も不安定な層。

第 階層 = 年間を通して仕事がなく、収入もない層。

以上の層を想定して、通訳のカシチュルン氏と調査対象者のC君に次の条件を提示して調査対象者を捜してもらった。

[1] 上記の四階層にそれぞれ該当する青年を1名以上含んでいること。

[2] 18~29歳の男性であること。

[3] 未婚者・既婚者のいずれでもよい。住居もゲルかアパートのいずれでもよい。

その結果、得られた調査対象者は上記の第 階層から1名、第 階層から2名の計3名であった。期待に反して第 階層と第 階層から選定できなかった理由は、C君が第 階層に属しているために彼の親友には該当するケースがなく、また彼の親友を通して捜してもらった該当するケースも「仕事のことは話したくない」と断われたためである。こうした経緯のため、今回の調査対象者は総じてやや上層部分に限られている。

調査の実施時期は2000年8月である。1ケース約2時間30分の面接調査であった。

ヒアリングした主な項目は以下の通りである。

《主な調査項目》

[1] 学卒後の職業生活歴。

[2] 現在の仕事と生活。

[3] 親友の仕事と生活、交友状況。

[4] 市場経済についての意見と今後の仕事。

調査対象者となった3名は、年齢が25~27歳であり、ほぼ同世代でウランバートル生まれである。その人生史をひもとけば、社会主義が崩壊した年に、彼らはいずれも社会に飛び立つ直前の高校生であった。したがって彼らは、社会主義時代の国家による就労の保障を前提に人生設計をしていた世代である。そして、就職する時点で市場経済という新しい条件に遭遇し、それまでの職業設計の変更と新たな対応を余儀なくされた世代でもある。その新しい条件への構えと対応によって、その後の人生に階層差も生じる結果となっている。この点を念頭において以下の記述をすすめたい。

生活と就労の事例

1. A君の事例（第 階層）

27歳，男，既婚．現職＝自営トラック輸送．学歴＝高卒．同居家族＝本人，妻（26歳），長女（3歳）．住居＝ゲル．

[1] 職業生活歴

「91年に高校卒業して2年間は失業していたね．失業といっても職探しはしていなかった．ブラブラしてただけ．社会主義崩壊の直後で，いきなり自分で職を探せといわれてもどうしていいかわからなかったよ．社会主義時代は国が職を保障してくれていたから，自分で探すという習慣がなかったんだ．とまどったね．この時は工場閉鎖が多くて首になる人が続出した．それで父が僕の職がないか知人に聞いてまわっていた．

93年に，親がホテルの運転手の仕事を見つけてきたんだ．運転免許はもっていたので，この仕事を1年あまりやった．でも給料は低かったね．それで95年に父が国营企業が民営化された時にその会社から安い小型トラックを買ってくれた．今はそのトラックで肉を運んでいるよ．」

[2] 現在の仕事と生活

「スーパーなどが専門店から買った肉を輸送する仕事だ．夏と秋に仕事が多くて，毎日仕事がある．休日はとれないね．日によるけど，だいたい朝6時から夕方4時までしかかかるとトラックの経費を除いて1日8000トゥグルクの収入だね．この収入で高いとも思わないが低いとも思わない．友人を見てもだいたいこんなもんじゃないかな．

でもこの仕事は冬はなくなる．田舎から肉が来ないからね．12月から3月の間だ．それに冬は道路が危険だし，車の故障も多くなるからね．それで冬の間は仕事がない．でも収入ゼロというわけにはいかないから，友人から情報を得たり，いっしょに組んでいろんな仕事をする．1昨年は友達と組んでソフトドリンク売ったし，去年は居酒屋に勤めていた．でも収入はちょっとだよ．でも，会社勤めする気はまったくないね．給料が低すぎる．生活やっていけないよ．

収入の3分の1は食費にかかる．あとは子供用品と自分たちの服，電気代で消えてしまう．貯金なんて全然できないよ．妻も仕事探しているけど，子供かかえて働けない．この仕事始めた頃には月収5000トゥグルクの収入があったが，物価が高くなったので現在は実質的に減ったね．特にパンと肉が高くなった．でも冬なんかにはきょうだいも助けてくれる．きょうだいはいろいろ助け合っている．いま住んでいるゲルも結婚する時に兄がゆずってくれた．でも自分の力で生活をもう少し良くするためには1日1万5000トゥグルクくらいにしたいね．車のエンジンやタイヤも新しくしたいしね．」

[3] 親友の仕事と生活

「親しくつきあっている友人は4人いる．一人は居酒屋の副経営者で，月収が10～12万トゥグルク．二人目は市営バスの運転手で，このバスは日本の援助で来たものだ．月収は12～15万トゥ

グルク。彼は同僚の運転手を自宅に送迎もしているから、同僚より少しいと聞いている。3人目は車の整備工場を経営している。収入はよく分からないが、2人雇っているし、モンゴルでは車の修理代は高いから、収入は多いだろうね。4人目はカシミア工場『ゴビ』のエンジニア。国立技術大学出身で、最近日本にも6ヶ月の研修に行ってきた。彼の月収は8~10万トゥグルクだ。もちろん会社勤めとしては高い給料だよ。

一緒に遊ぶのはビリヤード場が多いね。夜遅くまで遊んでるよ。社会のことはお互い意見が違いますが、時々そんな話もするね。」

[4] 市場経済について

「市場経済は正しい選択だったと思う。金さえあれば何でも手に入るようになったし、海外にも自由に出られるようになったからね。親友たちも大体同じように見ている。10人いれば9人は市場経済に賛成だ。残り1人は社会主義の時生活が良かった人。

でも、貧富の差が広がったことは確かだね。仕事が不安定になった人が増えた原因は給料が減ったためだよ。公務員の給料が僕の年で月4~5万トゥグルク。年金は多少上がっているのに給料は上がらない。社会主義のときは勤続年数で上がったが、今はほとんどかわらない。会社に勤めても現場作業員で月2~3万トゥグルクの人が多い。仕事はあるんだけど、働く気になれないんだよ。だから1ヶ月くらいで仕事を転々としている友人もある。これから大事なことは給料を上げることだね。生活レベルを上げてほしい。でもこれからは皆良くなっていくと思うよ。」

2. B君の事例 (第 階層)

25歳、男、既婚。現職=車の運転手と修理。学歴=建設専門学校。同居家族=父、母、本人、妻(25歳)、長男(5歳)、次男(3歳)。住居=ゲル。

[1] 職業生活歴

「93年に卒業して2年間、貿易・流通会社の運転手をしていた。専門の建設とは違う仕事かしてみたかったし、こちらの方が給料良かったからね。95年に結婚する時にいまの仕事に変えた。車を2年契約で借りてタクシー運転、それと時々車の修理の仕事だよ。当時は1日5000トゥグルクの収入があって、将来の見通しはあった。でも2年契約が終わって、いまは車はもっていない。当時より収入は随分減ったね。」

[2] 現在の仕事と生活

「車借りてタクシー、車修理が主な仕事だけど、決まった仕事はない。その日に見つけた仕事をしている。でもほとんど毎日仕事はあるよ。自分でも探すけど、仕事を誘い合ったり紹介しようグループがあるからね。週に1日くらい休むけど、これは決まった休日ではなくて仕事がない日だね。しかたなく休む。車の修理は簡単なものならできる。親がそういう仕事していたから教えてもらった。専門学校で溶接の資格はとったけど、建設関係の仕事は少ないし、給料も安いのでする気はないね。

月収は月9~15万トゥグルクだよ。冬は車のトラブルが多いから修理が多く、収入も増えるが、

夏は仕事が少ないんだ。妻は洋服工場で働いていて、月収は4万5000トゥグルク。二人合わせても生活費は足りないね。同居している両親は年金合わせて月3万6000トゥグルクもらっていて、時々援助してもらっている。収入の7~8割は食事代で消えてしまう。あとはときどき洋服を買うくらいだね。弟がアメリカに留学しているが、働きながら自分でやっているから、仕送りはしていない。

今はもっと安定した仕事につきたいと思っている。それでこれまでいろんな会社を訪問した。10回くらいまわったかなあ。でもあまり仕事がないし、あっても給料が低すぎてね。今の収入ほうが多い。まあ、当面は今の仕事でいくよ。

将来の夢？。自分の車修理工場を持つことだね。うちのゲルの敷地にね。でも200万~300万トゥグルクかかるからねえ。ちょっとむづかしいかなあ。月収の目標は50万トゥグルク。これだけあれば安定した生活ができるし、大体何でも買えるからね。」

[3] 親友の仕事と生活

「親友は子供の時からの親友が2人、仕事などでの親友が6~7人いるよ。子供の頃からの親友のひとりには、いま軍隊で車の修理部隊で教えている。月収は3万2000トゥグルクだね。もうひとりには、民間の建設会社でビルの窓とドアの設置の仕事をしている。かれの月収は12万トゥグルクだ。

友人とはよく会っているんな話をする。でも日常の生活の話が多いね。どういう仕事があるか、その仕事の収入はいくらか、どんなふうに生活すればいいかという話だね。この友人がいるから仕事はいつもある。政治のことはあまり話題にならない。友人とはビリヤードに行ったり、ピクニックやキャンプにも行く。最近ディスコができたことは知ってるけど、関心ないよ。ああいう所に行ってるのはラッキーで暇な人たちだよ。」

[4] 市場経済について

「市場経済になって良かったと思うよ。社会主義は何でも国が提供していたが、市場経済は自分で努力してやっていくという点が違う。よく働くほどいい生活ができることが市場経済のいい点だね。市場経済について、よかったという友人と良くなかったという友人は5対5くらいに分かれる。上からやってもらいたい人は社会主義がいいだろうね。能力ある人もない人も生活が安定していたから。まあ、市場経済になって犯罪がふえたことは確かだけどね。

もちろん、これから僕たちの生活は良くなっていくと信じているよ。政府は皆の仕事が良くなることに本気で努力してほしい。政府はやるべきことをちゃんとやるべきだね。」

3. C君の事例 (第 階層)

26歳, 男, 既婚. 現職 = 食堂自営, タクシー自営. 学歴 = 高卒. 同居家族 = 本人, 妻, 長男 (7歳). 住居 = アパート.

[1] 職業生活歴

「92年に学校を卒業して, 2年間はホテルの荷物運びの仕事をした. 僕はもともとサンボ (ロシア式相撲) と柔道が得意で, 94年からはプロ選手として国の代表にもなっていたんだ. この代表として国から月1万8000トゥグルクとジムのスポンサーから2万5000トゥグルクをもらっていた. しかし練習は毎日あるわけじゃないから, このプロスポーツと並行して94年からナイマー⁽⁶⁾を始めた. そして97年にプロの仕事がなくなって, ナイマーを本格的に始めたんだ. ナイマーで資金をためてタクシー用の車を買うことが目的だった.

ナイマーでは中国から野菜と果物を仕入れてモンゴルで売る, 中国で洋服仕入れてロシアで売るというのが多かった. 当時は1ドル800トゥグルクのレートで実入りはよかった. そして97年に念願のタクシー車を4000ドルで買った⁽⁷⁾. 当時は車は高い買い物だったよ. このタクシーの月収で30万トゥグルクが安定的に確保できるようになった. ナイマーは時間があれば今でも友人と組んでやっているよ. 家族3人で30万トゥグルクだとぎりぎりの生活だからね.」

[2] 現在の仕事と生活

「最近, 貯金をはたいて小さいモンゴル料理店をつくった. 今年の6月ころから考えだして, いろいろと計算してみても決断した. 10日前にできたばかりだよ. 作るのに約80万トゥグルクがかかった. でもこの店から月80万トゥグルクくらい稼げるんじゃないかと思込んでいる. 姉がレジ係などをして助けてくれている. 僕はタクシーの仕事も並行して続けるつもりだ. 30万トゥグルク稼げるからね.

ウランバートルでは, 僕のようにアパート借りて家族もって暮らすにはどうしても30万トゥグルクはかかる. その金がない若い人が多いから両親と住むか, 知り合いの家族に1部屋借りてすんでいる. だからモンゴルの若い人に「お金があれば一番ほしいのは何ですか」と聞いたら, たいいてい人はアパートだよ. 僕も将来の夢はアパートを買うことだね. 部屋3つのアパートを買うと1500万トゥグルクくらいだね.」

[3] 親友の生活と仕事

「いつも会っている親友は2人だね. ひとりには裁判所で警察官をしている. 23歳の独身だ. 彼の月収は4万4000トゥグルク. 公務員としては平均的な給料だよ. でもこれでは生活費が足りないから, ナイマーチンで補っている. 家賃と食費をカバーするために, 僕らとくんで20万トゥグルクくらいを稼いでいる. もう一人は25歳で子供が2人いるよ. 自分のバスを持っていて (市内ではよくみかけるワゴン車の自営バス --- 筆者注), 切符売りを一人雇ってその他の経費を除いて1日1~2万トゥグルクになる.

話は生活のことが多いね. どうしたら収入増やせるかとかナイマーチンのこととかをアドバイスしあう. 裁判所の友人いるから, 彼が法律がどう変わったとかどうなっているかを教えてくれ

る。休日は誘い合って郊外でキャンプすることが多いね。最近できたディスコかい。あれは一部の常連で、親と一緒に住んで金もらって働いていない連中だよ。そういう連中はけっこういるね。」

[4] 市場経済について

「もちろんよかったと思うよ。頑張っている人は良かったという人が多い。自分の資産も作れるようになったしね。友人たち 10 人のうち、市場経済になって良かったという人は 3 人くらいだ。残り 7 人は生活が悪くなって昔のほうが良かったと言っている。彼らは市場経済でどう生活するかが分かっていないんだ。社会主義はなんでも上から与えられたが、市場経済は自分で食っていかなきゃならない。僕は早くからナイマーチンやっていたから市場経済がどういうものか早くから分かっていた。わずかに 5000~1 万トゥグルクを元にして 1000 トゥグルクでパンツ仕入れて 1300 トゥグルクで売った。彼らはそういう努力をしてこなかった。

まあ、彼らもだんだん慣れてくるだろうけど。たしかに犯罪が増えたりしているけど、市場経済になったら一時的にこういう問題はでてくるものさ。ある意味では必要な段階なんだ。この段階を乗り越えると良くなると思うよ。

ただし、政府は給料をもっと上げてほしいね。会社の仕事はあるにはあるが、給料は 2~3 万トゥグルクというのが多い。これでは働く気になれないよ。社会主義時代は給料で誰でもやっていけたのに、市場経済になって給料を皆が生活できるレベルに上げていない。これを上げれば皆仕事をやるようになるよ。」

調査結果の分析

以上が、面接調査からえられた結果である。これらの事例は先に整理しておいた 4 階層のうちの第 1 階層に属する青年であり、調査対象としては限られている。けれどもここには、市場経済への移行期に職業人生を歩みだした都市青年の状況と意識の態様がかなり浮き彫りになっている。それらを要点的に整理することによって、今後の継続的な調査への足がかりとしたい。

[1] 上記の調査結果からまず確認できることは、社会主義時代には、とにもかくにも生活と就労が安定していたということである。その事実は「社会主義時代は国が仕事を保障してくれていた」(A 君)、「社会主義は何でも国が提供していた」(B 君)、「社会主義時代は給料で誰でもやっていけた」(C 君)と証言しているとおりである。それは「上から与えられた」ものではあったが、これを保障していた実績は認めている。こうした意識はすでに筆者が行った他の調査にも共通している。モンゴルの人々は、青年もふくめて社会主義時代を単純に否定していないという事実を押さえておくことは、移行期モンゴルを理解するうえで重要な点である。

[2] 次に重要な点は、青年層の就労が不安定にならざるを得ない構造がどこにあるのかという点である。それは、雇用労働者の賃金があまりにも低く押さえられているために、不安定でも収入のよい仕事につかざるを得ないということである。調査対象者 3 名の生活状況から推定すれば、夫婦と子供二人といういわゆる「標準世帯」が一応安定した生活を営むには月 25 万~30 万トウ

グルクが必要と考えられる。例えば住居費をとっても、ゲルの場合は地代だけで済むが、アパートの場合は3部屋の賃貸月額額は約10万トゥグルク、そのうちの1部屋を間借しても3~4万トゥグルクである⁽⁸⁾。彼らが言うように、公務員の賃金でさえ4万数千トゥグルクにすぎず、民間現場労働者では2~3万トゥグルクが多く、大卒高級技術者でさえ8~10万トゥグルクというのが実態である。これでは「仕事はあるけど働く気になれない」(A君)のである。こうした「低値安定」ともいうべき雇用労働が青年の働く意欲を損ね「自発的失業者」を生み出している。これを避けるためにはこの3事例のように自営の仕事をするか、C君の友人のようにナイマーチンをして生活費を補わなければならない。だから「政府は皆の仕事がよくなるように本気で努力してほしい」(B君)という切実な訴えを共通してあげているのである。

[3] さて、そういう共通項を背景としながらも、第 階層に属するC君と、第 階層に属するA君は鮮やかな対照性を示していることに注目したい。彼らはほぼ同時期に高校を卒業して市場経済化という新しい事態に直面したのであるが、それに対する職業人生の初発からの知識と構えが、両者の生活と仕事の安定度の違いを生み出している。まずA君の場合からみてみよう。彼は高卒後2年間、仕事をせずにブラブラしていた。それは「社会主義崩壊直後で、いきなり自分で職を探せといわれてもどうしていいか分からなかった」からである。そして現在はトラック輸送の自営をしているが、このトラックは親に買ってもらったものである。また現在住んでいるゲル住居も兄から譲り受けたものである。要するにA君は家族の力によって第 階層に属することが可能になったのである。これに対してC君の場合、すでに94年からわずかな自己資金でナイマーチンから始め、それはタクシーを買うという明確な目標をもって始めたものであった。彼の弁によれば、青年の多くが「市場経済でどう生活するかが分かっていない」のであり、「僕は早くからナイマーチンやっていたから、市場経済がどういうものか早くから分かっていた」のである。

モンゴルの場合、市場経済への移行は、多くの国民が実感しているようになりかなり拙速におこなわれた。したがって当時高校生であった彼らは、もともと市場経済についての予備知識を持ちうる余裕はなかったのである。したがってむしろA君のパターンが一般的であって、C君のパターンは少数といってよい。そこに現代のモンゴル青年の就労をめぐる困難の1つがあるといえよう。

[4] 次に興味深い事実は、彼らの情報交換と相互協力の豊かさである。この情報交換の中身は、彼らによれば圧倒的に仕事についての情報であり、生活についての相互アドバイスである。ウランバートルでは現在、アパート住民の多くは電話をもっているがA君やB君のようなゲル住居には電話線が架設されていないので、こうした情報交換はビリヤードなどに直接集まって行われる場合が多い。そしてここでの話し合いによって一緒に組んでナイマーや物品販売などの副業もしている。

わが国の青年においてはまず見られない、彼らのこうした豊かな相互援助の精神はどこから来るのだろうか。これを解き明かすには今一步の分析が必要であろうが、筆者の推論によれば、そこに遊牧社会モンゴルの国民性が息づいていると思われる。モンゴル社会の土台をなす遊牧民の

世界は、ホト・アイル⁽⁸⁾に象徴されるように互助によってなりたっている世界である。長い歴史をもつそういう国民性が、都市の青年のなかにも生きていられる。

[5] さらに、調査から明らかになった興味深いことの1つは、青年たちの市場経済についての意見である。これについて、前記のように調査対象の3名とも肯定的に受け止めている。しかし調査ではさらに、「あなたの周りの友人たち10人に市場経済に賛成か反対かを尋ねたとしたら、何人と何人に分かれますか」と質問した。その答えは前記のように「賛成9人、反対1人」(A君)、「賛成5人、反対5人」(B君)、「賛成3人、反対7人」(C君)というものであった。評価にかなり差があるから即断はできないが、これを仮に単純合計すれば賛成17人、反対13人ということになる。これは筆者の予想外の結果であった。青年では賛成が圧倒的に多いと予測していたからである。こういう評価の分かれ方がどこから生じるのかについてはC君の説明に集約されているので、ここでは繰り返さないが、上記[1]でも見たように、モンゴル国民は社会主義の全面否定によって市場経済に移行したのではないこと、そして移行期の今日なお青年に安定した生活と就労を保障していない現実を考慮すれば、上記の数値は決して的外れな数値とはいえないであろう。

[6] しかし同時に確認すべきことは、調査対象者の3名がそろって、「もちろん、これから僕たちの生活は良くなっていくと信じているよ」(B君)というように、モンゴル社会の将来に明るい意識を抱いていることである。これは3名が第 Ⅰ 階層に属しているからだけではない。A君もB君も当面の生活と仕事は楽ではないし安定しているわけでもない。けれども「よく働くほどいい生活ができる」という将来への確信に支えられているのである。実際、ウランバートル市内を歩いてみればわかることだが、失業中と思われる青年でも暗くなげやりの表情やしぐさは見られない。むしろ、まじめで質実剛健という印象を強く受けるのである⁽⁹⁾。モンゴル経済が安定軌道に乗るにはなお時間を要するであろうが、青年たちのこうした確信は徐々に広がっていくものと思われる。

注

(1) 拙稿「モンゴル都市民の家族生活史」、日本福祉大学研究紀要『現代と文化』102号、2000年3月。

(2) 同上参照。

(3) "Demographical Referene Book of Ulaanbaatar", Ulaanbaatar, 1998, p.69.

(4) "Women and Men in Mongolia", Ulaanbaatar, 1999, p.8 参照。

(5) 拙稿(1)参照。

(6) 「ナイマー」とは外国商品を売るいわゆる闇商のことで、市場経済化のもとで出現し活発化した。近年は減少している。

(7) なお2000年8月現在の為替レートは1ドル=約1000トゥグルクである。

(8) 通訳者カシチュルン氏の調査による。

(9) こうした印象は、毎年モンゴルに同行している島崎美代子元日本福祉大学教授の印象と全く一致している。